

Title	<特集>忠南教育研究所農村教育文化共同体活動の事例： 地域住民の生活から生み出された文化芸術教育
Author(s)	趙, 誠姫; 神谷, 智昭
Citation	京都大学生涯教育学・図書館情報学研究 (2011), 10: 135-151
Issue Date	2011-03
URL	http://hdl.handle.net/2433/139408
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

忠南教育研究所農村教育文化共同体活動の事例

—地域住民の生活から生み出された文化芸術教育—

趙 誠姫

(翻訳：神谷智昭)

A Case Study of Educational and Cultural Activities in Rural Communities
by Chungnam Educational Research Institute : the cultural and
artistic education devised from the life of the local residents

Sung-Heui CHO

(translated by Tomoaki KAMIYA)

1. 活動の展開

1. 地域研究所の出帆と地域との出会い

(1) 忠南教育研究所の出帆

忠南教育研究所は、忠南地域の教授と教師が中心となり、2000年9月、‘教育ならびに教育主体のアイデンティティ再定立、研究実践力の組織化ならびに持続可能的活動を準備し、地域単位の研究実践センター機能、教育運動連帯を強化すること’という創立趣旨を掲げて設立された、民間教育研究実践団体である。2002年2月、忠清南道教育庁の許可を受けた社団法人として登録され、2002年3月には忠清南道庁に非営利民間団体として登録された。また、2010年には、労働部から、教育文化分野の社会的企業として認められた。

‘生きる教育、相生¹⁾の教育’を目指す忠南教育研究所は、現場における教育実践の専門性を企図しており、活動内容の検証や長期的展望に限界を感じ始めていた教師達と、現場における実践性を含めた研究活動が要求される大学や研究機関の専門研究者達が、相互に交流・補完する活動の枠組みを作り、地域単位の教育運動の力を育て、地域の懸案事項に対する省察ならびに対案提示という方向へ向かってともに進もうと集まったものである。

研究所の事業が目指すところは、‘生きる教育、相生の教育’、そして‘地域に根ざした教育’である。‘子ども達の人生に必要な、自発性と創意性を基礎とし、多様性が尊重される共存と相生の教育’を実践するための、‘地域を愛し地域共同体に寄与する実践的教育研究’を主要な事業方針として設定し、事業を推進している。

(2) 村との邂逅

忠南教育研究所は、忠清南道公州市鳳峴里にあった古い鳳峴分校を、研究所として使用している。忠南教育研究所が鳳峴分校の場所に設置されたのは、2001年3月からである。忠南教育研究所が鳳峴分校と関係を持つようになったのは、後に忠南教育研究所の会員となった公州地域の一部教授と教師が、鳳峴分校が廃校となった時期に当たる1999年3月頃に起こっ

た、廃校反対闘争に関与していたことが、大きく作用した。

その後、1999年9月、忠南教育研究所が創立され、廃校を事務室として使用することを決定し、鳳岷分校にその本拠地を定めた。2000年10月、公州市教育庁と賃貸契約を結び、2001年3月からは研究所として、現副所長である李鎮哲と現事務局長である趙誠姫夫婦が子女達とともに、研究所内に私宅を構えて居住するに至り、本格的に鳳岷分校を基盤とした研究所の活動を開始することとなった。

(3) 教育を通じた出会い—鳳岷書堂開校

忠南教育研究所が鳳岷分校に入り、最初に着手したことは、‘鳳岷書堂’を開くことであった。2001年1月から、当時の初代所長であった權廷顔教授が公州市内で運営していた‘春秋書堂’の教師達が、研究所の近隣村落の子ども達を対象に、週1回の漢文教育を開始した。

(4) 鳳岷書堂から鳳岷村学校へ

子ども達の学びを通じた研究所と村の出会いは、たちまち住民教育と村落共同体事業へと移行した。子女が村学校に通っていた父母達を中心に、農楽教育などに関する要求が高まり、2002年に忠清南道庁の非営利民間団体支援事業として、‘農村型教育・文化共同体作り’事業が選定され、400万ウォンの補助金を受け、それまで資源ボランティア活動にのみ依存していた財政状況から脱し、放課後学習室と住民教室プログラムなど多様な活動をおこなえるようになり、これを契機に2002年6月22日、‘鳳岷村学校開校式’を開催するに至り、‘鳳岷書堂’から‘鳳岷村教室’へ拡大改編することとなった。

(5) 廃校を活用した多様な住民レベルの活動展開と出会いの場の拡大

忠南教育研究所は、村学校活動だけではなく、多様な行事を通じて住民との接点を広げていった。その中でも、2002年から実施された‘銀杏祭り’（2008年からは農耕文化教育広場へ改称）は、研究所近隣の3村落の構成員達が一緒に活動する初めての場となった。銀杏祭りは2010年に第9回を迎えた。2008年以降は、3村落のうちの一つである鳳岷里の5都2村事業²⁾と合流し、銀杏祭りと鳳岷里喪輿ソリ³⁾試演会が合わさって、鳳岷農耕文化広場という名前に改称され、1000人以上の人々が祭りに参加するなど、地域の教育共同体祭りとして、その地位を確固たるものにしていく。

都市化の影響により、農村地域でも共同体精神が徐々に消えかかっているが、近隣3村落を一つにまとめる役割を果たしていた学校が廃校になったことにより、一つの村のように生活していた3つの村落も、次第にその関係が遠くなってしまっていた。近隣村落を再び一つにすることは出来ないものかという思いから始まったのが、3村落の住民がともに参加する祭りであった。3村落の代表者で構成される住民協議会を設置し、実行の過程を通じて、3村落が再び一つとなる場を形成していったのである。プログラムは、3村落の住民達の生活に染みこんでいるというべき農村文化の中から選ばれた。特に、プログラム企画段階から、村の老人達が多様な経験と方法を提示し、これを基礎として、村の年長者達から、忘れ去られつつある伝統生活の知恵を学ぶ機会を設けたことによって、年長者達には自矜心を、これらの農村文化を学び楽しむ子ども達には、自分達の生活伝統文化の重要性を悟らせる場となった。農村地域の中から題材を探し、プログラム化する作業は、今後の農村教育文化共同体活動の基本方針となった。

2. 農村教育文化共同体活動の活性化

(1) 住民達の生活の中から掘り上げられた農村文化の価値とその教育プログラム化

村の住民達が研究所との事業に主体的に関与しはじめたのは、2003年度に実施した「歴史文化村作り事業」を通じてである。この事業は、当時の文化観光部が実施した公募事業であり、鳳峴は「鳳峴農耕文化村」事業における、歴史文化村として選定された。当時、公州市文化院の提案で、鳳峴は、歴史文化村作り事業に参加することになったが、事業計画書等を作成したことがない村の指導者達は、この事業の企画ならびに運営に、研究所の助力を要請し、研究所では村に入り住んでいた趙誠姫事務局長にこの仕事を任せた。趙誠姫事務局長は、鳳峴里歴史文化村作り推進委員であった、当時公州市庁文化観光課職員であった李乜載氏の助力を得ながら、「伝統農法と歳事風俗体験を通じた農耕文化復元—鳳峴農耕文化村」事業計画書を作成し、この計画書が歴史文化村作り事業に選定されたことによって、村とともにおこなう持続的事業の枠組みが出来上がったのである。鳳峴農耕文化村作りは、伝統的水田耕作と歳事風俗にあわせた農村文化体験プログラム運営が主たる事業内容であった。プログラム企画過程で、ソウル出身者として農村と農事に関して門外漢であった趙誠姫事務局長は、村の固有の伝統文化と水田耕作ならびに歳事風俗と関連する各種の情報を、村の老人達から蒐集した。それは村の老人のもつ価値の再発見でもあった。また、一つの村の中に眠る伝統文化と農耕文化を掘り起こし、教育プログラムとして作り上げる仕事に対して期待を持たれるようになった。

村とともにおこなう農耕文化体験プログラムは、地域の学校との連帯を実現することをさらに可能にした。田植えから草取り、刈り入れ、脱穀にいたるまで、地域の小中学生達が一緒に作業した。その過程で、村の住民達は一つ一つ記憶をよみがえらせ、多様なプログラムを提示したのであり、それは忠南教育研究所の週末学校と季節学校、農村文化体験学習など、農村の価値を活かした農村型教育プログラムの土台となった。またその後、村の老人達は、農村文化に関連した教育プログラムの講師としての役割を果たすこととなった。

その後、研究所は農村文化と自然を主題とした教育活動を本格的に展開し始めた。農村の住民と、農村の教育を担当する教師達が、自身が根付いた土地の価値を見だし、体験プログラムを開発し、学生達と住民、都市の人々とともに活動することのできる場を作っていくことが、主たる活動方針であった。各プログラムにおいて住民達は、伝統文化プログラムの企画者、そして講師、進行者として、忠南教育研究所の会員である先生達とともに、主体的に参加した。また、全てのプログラムには、近隣農村の青少年達が率先して参加し始めた。こうした一連の作業は、農村地域の教師達には農村に対する理解を基盤として地域社会とともに歩み、自身が教えている農村の子供達の周辺環境から活動プログラムを模索し、より効果的に多様な教育活動を指導することができるという点で、農村地域の教師達にとって示唆に富むところが大きかった。また、教育と文化の疎外地である農村から、自然親和的な新しい形態の教育・文化プログラムを開発することで、農村地域文化開発にも一定の役割を果たしはじめた。

(2) 積極的な支援事業誘致と農村教育文化共同体活動の活性化

忠南教育研究所は、2003年に労働部の社会的職場創出事業における「廃校を活用した農村学校ならびに文化共同体運営事業」が選定され、7名の教育人材と3名の村住民（農村文化体験学

習担当)を雇用することとなった。労働部の財政支援により、研究所の各種事業進行は弾力性を持つこととなった。この時の事業目標は、次のようなものである。

農村教育の疎外と萎縮の象徴である廃校を、地域の青少年と住民達に良質の教育・文化体験機会を提供する場として活用し、廃校に起因する農村地域民達の喪失感を軽減し、多様な教育・文化プログラムを通じて新しい情報マインドと教育・文化に対するビジョンを形成することで、新しい形の農村型教育・文化共同体を形成することを目的とする。

- ①教育：落伍した教育環境により疎外感が深い農村地域の青少年とその父母に対し、インターネット教育、書堂教育を通じた礼節教育、読書指導、学父母教室などの、良質の教育機会提供する
- ②文化：消えゆく農村の伝統文化に再び光をあてる伝統文化体験学校活動を通じ、農村地域住民の自矜心を高め、農村伝統文化の価値に対する認識を高める
- ③共同体：民間団体と地域住民との健全な紐帯を形成することで、村と民間団体が一緒になって、落伍した農村の教育・文化環境を改善するために、地域住民の手により掘り起こされる農村教育開発の一つの模範を創出しようとするものである [忠南教育研究所2003年度社会的職場創出事業事業計画書]

教育を通じた住民達との接触が活発化するにつれ、住民達の要求もまた多様化し始めた。この時から、研究所主幹の住民ならびに学生教育だけではなく、南泉里婦女会の健康体操、同郷体育会の作目班⁴⁾教育、住民農楽隊教育など、住民達の教育需要に対する、場所ならびに運営支援も開始した。それにあわせて、近隣村落の広報物、書類、事業企画等に関する行政的実務支援の要請も広がり、研究所が近隣村落の教育の場や情報センターなどの役割を果たすこととなった。

(3) 地域と地域住民の潜在能力開発を通じた教育プログラムの多様化

農村文化を根幹とした学生教育プログラムが増えるとともに、鳳峴里老人会との関係が緊密となっていった。老人会長団が中心となり、研究所の農村文化体験活動に積極的に参加するようになった。

老人会会員を中心とした村住民達の研究所教育活動への参加は、その後、社会文化芸術教育、週末学校等のプログラムを多様化させることに大きな役割を果たし、研究所の学生活動がその他の青少年関連プログラムと差別化されることに大きく寄与した。老人会会員達はまた、自分達の存在価値に対する新しい自覚とともに、農村文化の価値をも新たに発見することになり、このような自覚は、その後、鳳峴里5都2村マウル⁵⁾作り事業などの村事業の方針確定にも大きな影響を与えた。

老人会との協力は、村と研究所の距離を縮める契機となった。子ども達の教育と青壮年層である彼らの両親達との接触は、村学校等を通じてすでに実現されていたが、村の住民の半数以上を占める老人達との接点は、文化教育会の場においてはもつことが難しく、村の老人達が学生教育活動に積極参加することで、むしろ研究所活動に対してより積極的な支持者となり始め

特集② 趙（訳：神谷）忠南教育研究所農村教育文化共同体活動の事例

た。特に、このような活動を通じて、祖孫家庭⁶⁾をまとめている老人の方々との教育相談ならびに教育支援活動も自然と起こり始めた。農村文化を主題とした季節学校、農村文化体験学習などに住民達が参加しながら、農村文化の価値に対する新しい発見が起こり、村においても、農村の発展とは都市に追いつくことではなく、農村固有の伝統を活かすことにあるという考え方をするようになった。特に2003年、歴史文化村作り事業の中の1つとして‘農耕文化資料館’作り事業が進行し、各家々の倉庫や畑等に打ち棄てられていた各種の生活道具ならびに農具などが資料館に集められたのであり、この時に作られた資料館は、その後、村の象徴であり誇りとなっただけでなく、研究所を訪れる多くの学生達に、すばらしい教育資料館としての役割を果たしている。

この時期には、農村教育文化共同体活動の内容にも変化が生じ始めていた。農村住民達の生活に関する理解は、農村文化の価値を再発見することになり、これを教育プログラム化し、学生教育活動に適用し、学校と地域が共におこなう教育活動の場を開き始めた。このような教育活動に、住民達がプログラム企画ならびに講師等として参加するようになり、一般的な農村教育文化共同体活動の受患者から活動主体へと変化し始めた。このような変化により、住民達に農村教育文化共同体活動が、村と自分たちの生活の変化をもたらしてくれるという期待を抱かせるようになった。

3. 農村文化を通じた地域と学校の結びつき

(1) 農村青少年文化学校を通じた活動領域の拡大

2006年度からは、既存の村学校を拡大し‘農村青少年文化学校ケヤキ’の運営を開始した。‘農村青少年のための文化学校運営’事業は、労働部の社会的職場創出事業に選定され、2006年3月から3年間、10名の人件費の支援を受けることとなり、本格的に運営を開始したものである。社会的職場作り創出事業は、2008年12月、公州市庁と連携した事業として、再び1年間の支援を確保することが出来た。

農村青少年文化学校ケヤキの活動が本格化するに従い、村の放課後学習室と休暇中の季節学校、住民教室プログラムにとどまっていた状態から抜けだし、既存のプログラムに加え、週末学校、放課後教室講師派遣、住民懸案事業ならびに福祉事業支援など、プログラムが多様化した。この活動は、研究所の農村教育活動活性化の方向を定め、その後研究所が地域と学校とともに、より拡大した農村教育文化共同体活動をおこなう基礎となった。ケヤキ学校の最も大きな特徴は、学校の中と外が意思疎通を図り、相生する構造を作り上げているということにある。研究所会員の大多数を占める小中高教師達が、ケヤキの週末学校、季節学校プログラム企画をともにおこない、反対にケヤキの教師や地域住民達は、地域学校の特別活動、現場体験学習、キャンプ等に協力している。このように、学校の内外を横断するネットワーク活動を通じ、地域児童・青少年のための援助と学びの場を提供し、地域の教育力を強化させている。

(2) 地域から学び学校で実践

それとともに、農村教育に関する研究活動も活発になった。その中でも、2002年度から運営されている季節学校参加教師達が中心となって構成された青少年文化研究チームは、

2006年と2007年に、韓国文化芸術教育振興院の教師自立研究会支援事業に選定され、それまでの農村文化プログラム開発と運営を土台とした『地域文化と自然生態を結合させた文化芸術教育プログラム開発』（2006年）、『学級運営適用文化芸術教育プログラム開発』（2007年）という2冊の研究報告書を出版し、『放課後教育プログラム開発—伝統文化体験室』[忠清南道教育庁受託研究 2007]を発行した。

青少年文化研究チームのこのようなプログラム開発研究活動は、2002年度から運営されてきた季節学校活動が基礎となっている。忠南教育研究所季節学校の特性は、農村文化と農村の自然環境から活動の主題と素材を探ることであるが、このような教育活動の成果が集められ、自然に農村住民の生活と自然環境の中から生み出される多様なプログラム開発が可能になったのである。青少年文化研究チーム所属の現場の教師達は、プログラム開発過程において地域住民達を講師として、藁草教師研修を実施するなどしているが、教師達が地域の文化を地域住民から学という活動は、教師達には農村文化の価値を活かした教育プログラムを開発させ、普段は学ぶことが難しい多様な技能を身につけ、これを学校現場で子ども達の教育に活用することが出来るようにした。これとともに、地域住民達にとっては、自分たちの生活の中に眠っている農村文化の価値を発見し、これを拡散させる力を強化する契機となった。

はじめは教えることに慣れておらず、何も言わずただ実演してみせることに没頭するだけであったお年寄り達の講義法が、見違えるほど発展したのは、この教師研修を通じてである。ちょうど教師研修があった日、学生研修も一緒におこなわれていたが、先にお年寄り達に縄繻いを習った教師達が、子ども達に丁寧に縄繻いの方法を教えてあげ、間違った部分を直してあげる姿を見て、お年寄り達は、自分たちの講義法に不足している部分を見つけたのである。教師達は、お年寄り達に伝統文化を学び、お年寄り達はまた教師達に講義法を学ぶという、相生の教育効果が生まれたと言うべきか！学ぶということと教えるということは、表裏一体なのである[趙誠姫 2007]。

こうして開発されたプログラムは、再び学校現場で多様な文化芸術教育活動に活用されている。このような経験は、農村の価値を活かした教育の大切さと、それを通じ、農村の特性を活かした農村教育はいくらでも実現することが出来るという期待を抱かせるに十分であった。地域で学び学校で実践する活動となっているのだ。

(3) 事業実行の方法としての公募事業遂行とその限界

社会的職場作り事業を通じて10名の常勤職員をそなえたことで、2006年を起点として外部支援事業の遂行幅も広がっていった。支援事業は大部分が事業公募を通じて行われた。これは財政的な事情によるものである。研究所の財政は会員の会費で運営されているが、会員会費だけでは、労働部の支援を受けない1名の常勤者（事務局長）の給与と事務室運営費をまかなうだけで精一杯である。そのような中でも、人手は必要で、事業費がないにもかかわらず、やらなければならない事業は多いという状況を打開するため、解決策として各種の公募事業に支援をうけたのであるが、これらの事業は大部分が農村教育文化共同体活動に関するものであ

特集② 趙（訳：神谷）忠南教育研究所農村教育文化共同体活動の事例

た。

2006～2010年度に遂行した支援事業（表1参照）の大部分は、青少年文化学校ケヤキ事業と関連したものであるが、研究所が事前に計画案や事業計画案を遂行していたところに、援助となる事業を探してきて申請したため、やや‘事業のための事業’へと流れてしまった感がある点が限界として挙げられる。国家青少年委員会の青少年活動増進事業選定は、週末学校に活気を与えた。進路教育と農村文化を結合させた‘青少年法古創新⁷⁾広場’がそれであるが、この事業は学校を訪問し活動を進めていくことで、その後‘訪問教育活動’の土台となり、サムスン選択機会奨学財団の小さな学びの場事業（農村青少年進路探検隊）は、2008年度に、地域ネットワーク事業へ発展する母胎となった。

<表1> 2006～2009年度文化芸術教育関連外部支援事業

2006年度	
事業名	支援機関
社会的職場創出事業—農村青少年文化学校運営	労働部
農村型教育文化共同体運営	忠清南道庁
都農間文化繋ぎ	忠清南道庁
村祭り	公州市庁
忠孝礼教室（冬、夏期）	公州市庁
社会脆弱階層文化芸術教育支援事業	文観部、忠清南道庁、公州市庁
公州大師大生農村文化体験	公州大
農村文化体験学習	テサン農村文化財団
文化分かち合い、文化バウチャー	韓国文化芸術委員会
2007年度	
事業名	支援機関
社会的職場創出事業—農村青少年文化学校運営	労働部
青少年活動増進事業	青少年委員会
セトミン ⁸⁾ 芸術教育事業等	韓国文化芸術教育振興院
農村型教育文化共同体運営	忠清南道庁
都農間文化繋ぎ	忠清南道庁
村祭り	公州市庁
忠孝礼教室（冬、夏期）	公州市庁
学校暴力解決のための伝統人形劇	暴力のない社会作り忠南本部
社会脆弱階層文化芸術教育支援事業	文観部、忠清南道庁、公州市庁
農村文化体験学習	テサン農村文化財団
2008年度	
事業名	支援機関
社会的職場創出事業—農村青少年文化学校運営	労働部

選択機会地域ネットワーク事業－忠南農村教育希望探し	サムスン選択機会奨学財団
社会脆弱階層文化芸術教育支援事業－我らいるうちに学べ	文観部、忠南道庁、公州市庁
農村型教育文化共同体運営	忠清南道庁
都農間文化繋ぎ	忠清南道庁
村祭り	公州市庁
忠孝礼教室（冬、夏期）	公州市庁
私たちの村の宝探し	農漁村青少年育成財団
2009年度	
事業名	支援機関
社会的職場創出事業－農村青少年文化学校運営	労働部
選択機会地域ネットワーク事業－忠南農村教育希望探し	サムスン選択機会奨学財団
生活文化共同体模範村事業－農村文化希望探し	文化体育観光部
我らいるうちに学べ－老人文化芸術教育	韓国文化芸術教育振興院
農村型教育文化共同体運営	忠清南道庁
都農間文化繋ぎ	忠清南道庁
村祭り	公州市庁
忠孝礼教室（冬、夏期）	公州市庁
2010年度	
事業名	支援機関
社会的職場創出事業－農村青少年文化学校運営	労働部
選択機会地域ネットワーク事業－忠南農村教育希望探し	サムスン選択機会奨学財団
生活文化共同体模範村事業－農村文化希望探し	文化体育観光部
都農間文化繋ぎ	忠清南道庁
村祭り	公州市庁
忠孝礼教室（冬、夏期）	公州市庁

一方、文化観光部と忠清南道庁、公州市庁が共同支援する社会脆弱階層文化芸術教育支援事業選定は、村の住民達に農村文化を伝承する機会を提供した。

伝統文化に対する関心をもって振り返ってみると、村の老人達の生活の中には、無限の物語と学ぶべきところが詰まっている。しかし、まさにその方々は、自身の生活の中に自然としみこんでいる多様な生活方式が、学ぶべき価値があると考えることが出来ずにいる。それらを体験学習を通じて取り出してみたところ、実に無窮無尽のプログラムが生み出され始めたのである

特集② 趙（訳：神谷）忠南教育研究所農村教育文化共同体活動の事例

[趙誠姫 2007]。

農耕文化継承教室は、2003年に研究所が設立された鳳峴里が、当時文化観光部が公募した歴史文化村作り支援事業に‘鳳峴農耕文化村’として選定されたことで始まったものである。農耕文化体験学習をおこなったところ、60代以上の老人を除いては、藁工芸、労働歌などの農耕文化を受け継ぐ後継者がいないという実態が明らかとなり、これを上の世代から下の世代へ学ばせる作業が必要だという認識のもと、70～80代の村の老人会役員達を講師として招き、村民達が伝統文化を学ぶことの出来る場を用意したのである。

2006年度には、韓国文化芸術教育推進院が公募した、疎外階層文化芸術教育支援事業に‘鳳峴水田文化教室’が選定され、地域の教師と学生を対象に、藁工芸研修を実施するまでになった。2008～2009年度のプログラムは、“我らいるうちに学べ”として、地域の老人達が亡くなる前に、地域の文化を伝授するプログラムとして、60代の老人達であっても覚束なくなりつつある農村文化を継承する契機となったとともに、上の世代から下の世代への文化伝授が、村民民の間に生まれる契機となった。

しかし、公募事業は、事業の継続性を担保することが出来ないという根本的限界を抱えている。このような財政構造は、事業の継続性に対する不確信と、それに起因する常勤者達の展望欠如を呼び起こし、これがある意味では事業遂行をルーズにしてしまう場合もある。この問題についての対策が急がれる。

(4) 村懸案事業に村の一員として参加

2008年度には、忠南教育研究所が位置する公州市牛城面鳳峴里が、公州市5都2村模範村に選定された。研究所は去る2003年にも、鳳峴里歴史文化村作り事業に企画から運営まで関わることになった。しかし2003年当時は、村の一員や主体としての参加というよりは、村を支援するという側面が強かった。村、あるいは一部指導者が中心となり事業を決定し運営していたために、村の住民全体の事業として認識されることがないままに進んでいたことは、農耕遺物資料館設置、農村文化教育プログラム開発ならびに村の認知度高揚という事業の成果とは別として、村共同体の強化には特段の役割を果たすことが出来なかったということでもあった。しかし、公州市5都2村作り事業は、村再生という側面から村住民全体の懸案事業として受け止められており、村は研究所に企画ならびに広報、運営委全般に関するコンサルティングと支援を要請してきた。研究所は事務局を中心とし、住みよい村作り事業計画書を作成、鳳峴農耕文化教育広場事業計画ならびに広報、運営まで、事業全般に参加することになった。それまでの研究所と村との接点は、教育に関する住民達の要求を取り入れるという側面もあったが、ほとんど大部分は、研究所でまず事業を企画し、住民達を説得し、参加させるという形式であった。一つの例を挙げれば、2010年度に第9回を迎える銀杏祭り（2008年には鳳峴農耕文化教育広場として運営）も、村住民とともに協議会を作り、全ての過程を論議してきたということからも、住民事業ということよりは、研究所事業として認識する住民の方が多かった。ところが、村懸案事業を進行するにあたり、研究所の役割に対して期待が大きくなり、懸案事業だけでなく、それまで研究所が進めてきた村共同体事業に関する認識も、大きく変わり始め

ていた。

農村事業に対する住民教育の必要性が高まるにつれ、農村と関連した教育プログラムと模範事例に関する情報を要請されることもあり、長期的な村の発展計画に関する意見を聞くことも多くなった。また、それまで研究所主導でおこなってきた村教育共同体活動を、村懸案事業と連携させて解決しようという努力も増していった。また、村懸案事業共同運営を通じて、公州市や牛城面事務所や牛城農協、牛城面所在の小中学校との関係もまた緊密になっていった。忠南教育研究所は、もちろん牛城面でのみ限定して活動する団体ではないが、牛城面に所在をおく以上、牛城面内での農村教育文化共同体活動の活性化は、大きな意味をもつものであった。

(5) 農村教育文化共同体活動の量的、質的变化

2008年からは忠南教育研究所農村教育文化共同体活動の量的、質的变化が起り始めた。

一つ目は、農村教育文化共同体の活動主体の変化である。それまで農村教育文化共同体の活動主体は、忠南教育研究所の会員、その中でも運営委員達を中心であり、事業に対する認識も‘忠南教育研究所の農村教育文化共同体’という認識が強かった。事業内容上、農村地域住民達が参加するプログラムは多かったが、地域住民達自身が農村教育文化共同体の主体であるという認識は弱かった。ところが、村の懸案事業と農村教育文化共同体活動が結合するに至り、連帯の力と可能性を確信するようになり、住民達の生活の中から生み出されたプログラムを、村の住民間相互教育形態として進めていくため、プログラム企画から運営、そして事業の目的が村の住民の生活と緊密に連携することで、教育を通じた村の変化と住民生活の変化に関する期待の中から、積極的な参加が起り始めた。また、青少年文化学校ケヤキ事業が活性化するとともに、多様な人的資源が結集すると同時に教育活動に参加するようになったことで、忠南教育研究所の外部の教育人材が、農村教育文化共同体活動に参加する機会が用意された。この時期、最も注目すべき点は、公式的に教育ネットワークが結成されたということである。忠南教育研究所を代表機関として、専門教育研究機関、学校、地域内学習室、科学と文化芸術専門家団体などの教育関連機関ならびに団体が、ともに地域の教育力を形成させることに力を注ぎ、事業を共同運営するようになった。

二つ目に、事業の領域が拡大したという点である。研究所近隣住民の教育の他、学生達の学校外の教育活動が主であったものから、放課後教育活動、啓発活動、特別活動などの学校と連携したプログラム支援活動と講師支援活動が、学校内外で実施され、農村教育活性化のための教師研修ならびに研究作業も、研究所以外の専門人材との協力により活気を得るようになった。何より、住民教育活動が、村作り事業と連携し、地域住民の教育力量と文化力量の強化研修に発展し、5都2村事業などの村懸案事業に共同参加するようになり、教育を通じた村作り事業の基盤を形成することになった。

4. 生活文化共同体としての発展

忠南教育研究所と鳳峴里では、2009年度から、文化教育観光部の支援を受け、生活文化共同体事業を運営し始めた。

鳳峴里住民と忠南教育研究所が持続的に実施してきた文化芸術教育活動は、住民と地域民間

特集② 趙（訳：神谷）忠南教育研究所農村教育文化共同体活動の事例

団体全てに、地域の価値と共同体の大切さを感じさせる契機となった。しかし、それまでの活動は、主に期間限定の支援事業に支えられていたため、各活動が断続的に途切れてしまったり、参加人員を制限する残念な場面もあった。これを反省し、生活文化共同体事業を通じては、地域の文化的価値を基礎とし、住民達の文化力量を引き上げ、彼らを講師として活用することで、住民自身の力により運営される生活文化共同体の人材力を育てることに重点をおいて運営することとした。また、映画上映ならびに村をドキュメンタリー化する作業を始めたことで、生活文化共同体の構成員各自の生活を理解し、互いに意思疎通する契機にしようという意図もあった。

<表2>生活文化共同体事業内容

鳳峴生活共同体文化舎廊房運営
○文化舎廊房開設
○文化舎廊房サークル運営：農楽サークル、演劇サークル、薬工芸サークル
○文化舎廊房サークル発表会
鳳峴里文化発展所運営
○子どもと青少年のための写真映像教室（月2回）
○鳳峴里、そして鳳峴の村人を題材としたドキュメンタリー制作（ドキュメンタリー1編制作）
○鳳峴里月夜映画館運営（月1回）

村住民がどのような形にせよ主体的にサークルを形成し集まったのは、これがはじめてだった。事業初期、最も重点をおきながらも最も難しかったことが、まさに‘生活文化共同体作り’事業の意味を理解させることであった。共同体を基礎として村が運営されてきて、また現在も都市に比べれば共同体が相対的によく維持されている農村であっても、住民達は‘共同体’という概念自体をよく理解できていなかったためである。‘生活文化’もまた同様である。長い間共に農耕文化を基礎として村の伝統を維持してきたといっても、概念としてそれを理解し実践しているわけではないので、‘生活文化共同体’事業の意味と実行の方向に関しても、文字をもって形式的に理解させることは、住民達には効果がなかった。そのため、事業説明も、住民達がどのような活動をすればどのような点で村の助けとなり、村人の生活にどのような喜びを加えることができ、また子ども達の教育にはどのような利点があるかということ、直接それまでの活動を例に挙げ説明し、理解を求めたのだった。

事業施行時点が農繁期にあたっていたため、まずは子ども達を主として事業を実施し、大人達には持続的な広報をおこなう期間と位置づけて運営を開始した。

里長、婦人会長、老人会長、大洞契長、5都2村推進委員長、セマウル指導者など村落組織の中心となる人々を集め、持続的に事業説明を兼ねた会議をもち、協力を求め、村の和合と発展に寄与する事業であるという認識を高めていった。その結果、農楽サークルは婦人会員達が、

薬工芸サークルは老人会員達を中心となりサークル形成がおこなわれ、サークル運営が弾力性をもつようになり、自然と参加人員も増えていった。

サークル活動を通じて得られた成果とえば、‘ともに学ぶ喜び’を知らしめたことと、その喜びが原動力となり、また別の欲求と期待が生まれたという点である。集まりはしても、雑談で日を暮らすという無気力な集まりから抜けだし、共同の目標（村の農楽団構成、薬工芸伝授、村の児童演劇団構成、村文化の活性化など）を立て、ともに発展していこうとする中から、新しい学びの共同体が形成されているのである。

互いに葛藤関係にあった人々も、声を合わせる過程を通じ、互いに配慮しあうことを知ることとなり（農楽サークル）、覚束なくなっていた昔の生活の姿と伝統を多くの記憶を集めて甦らせ（薬工芸サークル）、村の住民達の生活が少しずつ活気を増していった。

子どもから老人まで全員が1カ所に集まり、同じ映画を観賞し、共同の記憶を積み重ねていくことも、住民達にとって非常によい楽しみとなっている（鳳峴月夜映画館）。村の子ども達が作った映画をともに鑑賞し、時には映画の賛助出演者となったり、村に関する話を聞かせてくれ、村の姿を記録化することに力を注ぐことで、鳳峴里の住民達は生気を得ている。

また、今回の事業を通じ、村の文化を中心として、外部専門家集団、地域の学校、都市と農村間の連携も活発となった。このような連携を基盤として、文化を通じた地域の活性化について話す機会が作られている。

専門家集団との連携は、プログラムの質を高めることに寄与しただけでなく、農村で不足しがちな講師人材を確保することに大きく役立った。このような連携活動は、鳳峴里の生活文化共同体活動を通じて経験を積み、これを別の地域に広めることにも寄与すると期待される。

しかし、この事業の最も大きな成果は、住民達が文化の主体となっていることである。

薬工芸サークル活動が活性化し、これに参加する老人会員達の講義力も高まった。また多様な活動は新しい文化芸術教育プログラム開発へも繋がっている。伝統簾を作り、これを子ども達の教育活動に再構成し、忠南教育研究所が忠南文化芸術教育支援センターと公州教育庁とともにおこなった、2010年度保育教室文化芸術プログラム運営にも、老人講師達が進行するプログラムが一部反映された。

またこのような活動は、村の農村文化プログラム運営の専門性を伸ばすことにも助けとなり、5都2村事業など、村事業の活性化と村の収益創出にも寄与したと考えられる。

鳳峴月夜映画館とドキュメント撮影を通じては、メディア文化産業に関する理解と親熟を高め、メディア文化の新しい消費主体として住民を育成したという側面がある。

II. 分析ならびに議論

1. 農村教育文化共同体活動の意味

(1) 生活を通じて学ぶ文化芸術教育と農村教育文化共同体活動

2001年、鳳峴里のある廃校に本拠地を定めた忠南教育研究所は、それ以降9年間、鳳峴里住民達と多様な教育文化共同体活動を実施してきた。農村教育文化共同体活動は、鳳峴村学

特集② 趙（訳：神谷）忠南教育研究所農村教育文化共同体活動の事例

校を開くことから始まった。初めは、村の子ども達の放課後学習室という形で運営されていたが、この活動を通じて、子ども達の両親である村の大人達との意思疎通も自然におこりはじめた。特に、学習室の子ども達の相当数が、祖孫家庭の子ども達であり、村のお年寄り達との関係もまた緊密になり、その方々のための活動も模索するようになった。

子ども達が学校に行っている昼の時間には、住民達を対象としてコンピューター、ハンゲル、農楽などを教える住民教室を開き、ともに学ぶ場をつくり、このような出会いが土台となり、村とともに‘歴史文化村作り事業’‘農村文化体験学校’などの事業を進めていくことになった。この事業を通じて発見したことが、まさに‘地域民達の生活の中に無窮無限に内在している伝統文化の価値’であった。

（2）農村の共同体文化復元と地域民達の自矜心高揚

我々がおこなってきた活動自体は疎薄なものである。やってきたことといえば、ひたすら農村で純朴に生きてきたお年寄り達が知っている、体に染みついたことどもの価値を取り出し、子ども達とともにわけあう場を準備することである。有名な文化芸術教育専門家もおらず、これに先立つ特別にめばしい活動があったわけでもない。

しかし子ども達は、お年寄りとともに学び、技術を身につけていくなかで、薄らぎつつある農村文化を体で体験し、その中に自然が込められ、共同体精神が染みこんでいることを、少しずつ悟っていったのである。それは閉ざされた心を開き、他人と交流疎通する端緒となった。都市と農村の格差による気後れ、都市地域民達への根拠のない劣等感を感じがちな農村住民にとって、多様な文化芸術体験を通じた学習は、自分たちの文化には十分に価値があり、それをより活性化させなければならないと信じさせ、そのためのより良いプログラムを構成し実施するため、村人は持続的に努力していこうとしている。

農村を甦らせる鍵は、まさに地域内の教育・文化環境の改善、その中でも農村文化に関する自矜心を高めることのできる多様な余暇・文化体験活動の場を用意することである。そして、これを通じて農村生活の潜在的可能性を地域住民自身が認識することが重要であるという考えのもと、農村住民達とともに生活文化共同体を構成し、継続的にその方法を探索し、実践していこうと努力することである。

2. 農村教育文化共同体活動の目的

（1）“文化が生きてこそ農村も生きる”一廃校を通じた農村教育文化共同体の活性化

農村を甦らせる鍵は、まさに農村文化に関する自矜心を高めることのできる多様な余暇・文化体験活動の場を用意し、これを通じて農村生活の潜在的可能性を地域住民自身が認識することが重要であるという考えのもと、農村教育文化疎外の象徴である廃校を中心に、農村地域の住民達とともにその方法を探索し実践していこうとすることである。

（2）農村文化を基礎とした多様な文化体験の場を作ろう一住民生活文化共同体基盤形成

（3）我々の農村文化と共同体精神の脈を繋ぐ一農村文化の価値発見

村の年長者達から忘れ去られつつある農村生活の知恵を学ぶ機会を準備することで、村の年長者には自矜心を、学ぶ子ども達には農村文化の大切さを悟らせる。

3. 活動展開の重要要素

(1) 意思疎通の姿勢

最も身近な場所における実践に対する自覚と、村で最も必要とされるものであると同時に、忠南教育研究所が最も貢献することの出来る部分である‘教育’を通じた地域との邂逅は、農村教育文化共同体の最初の出発点として考えさせられるところが大きい。地域に対する理解や準備なく、“これが良いものであるから、ついてこい”というようなやり方の活動は、成功することが難しい。地域民達との持続的接触を土台とし、彼らの要求と期待に応える疎通の姿勢が優先されなければならない。このような意味において、事業よりは信頼と協力を優先した忠南教育研究所の姿勢は、それ自体は疎薄ではあるが、結果として地域に強固な根を張ることのできた背景となったと考えられる。

(2) 参加者達の主体意識

農村教育文化共同体活動をおこなうに際し、最も重要なものは、参加者達の主体意識である。各活動主体が、共同体活動に対してどの程度理解し同意しているか、共同体活動を自分の問題として捉えているか否かによって、農村教育文化共同体の健全性が維持される。このような側面において、忠南教育研究所の農村教育文化共同体活動を通じ、忠南教育研究所会員と地域住民、学生の変化は、目覚ましいほどである。‘農村教師’としてのアイデンティティーに悩みつつも、研究を通じて‘農村教育活性化は農村地域と地域民に対する理解と連携が基礎にならない’と自覚するようになった忠南教育研究所会員達は、地域のもつ価値に目を向けるようになり、農村教育文化共同体活動にも変化が生じ始めたのである。

(3) 農村の価値の再発見

農村住民の生活に対する理解は、農村文化の価値を再発見することとなり、これを教育プログラム化し、学生教育活動に適用させ、学生と地域がともに実践する教育活動の場を開くことを通じ、住民達もまた、農村教育文化共同体活動が村と自分達の生活の変化をもたらすという期待を持ち始めた。

(4) 地域教育事業に対する議論と解決の場作り

地域に対する理解は、農村教育文化共同体活動に、多様性と健全性を付与し、事業の質的・量的拡大をもたらした。鳳峴村学校は、農村青少年文化学校ケヤキとして拡大改編され、近隣村落住民と学生達を対象とした事業は、忠南全域を対象とする事業へと拡大された。青少年文化学校ケヤキ事業が活性化され、多様な人材が集結するようになり、また彼らが教育活動に参加するようになったことにより、忠南教育研究所外部の教育人材が、農村教育文化共同体活動に参加する契機が作られ、これを土台にした公式的教育ネットワークが結成された。このようなネットワーク結成は、地域教育事業に関する論議と共同解決の場が用意されたという点で、農村教育文化共同体の掲げる目的実現に一步近づくということの意味する。

農村教育文化共同体活動においては、農村地域に対する理解と要求に応える方式、地域住民の生活に全面的に接近するという方式、子ども達への援助と子ども達の学びを支援するというものにとどまらず地域住民の教育力形成に寄与するという方式、学校と地域を媒介し相互疎通する方式もとらなければならないということを、忠南教育研究所農村教育文化共同体活動

特集② 趙（訳：神谷）忠南教育研究所農村教育文化共同体活動の事例

を通じ、再び確認することが出来た。また、農村教育文化共同体構成員達に対する信頼も重要である。教育活動の成果はすぐに出るものではない。人々の心を動かすことは、非常に時間を必要とするのである。農村教育文化共同体活動においても、そうした忍耐が必要である。

4. 活動推進力

忠南教育研究所の活動の推進力は、次の6つに整理することが出来る。

1つ目、研修所会員の教授ならびに教師達の教育力量を十分に活用したという点である。人的資源が不足する農村教育の現状を考慮するとき、多様な教育力量と真正性を持った人材が豊富だということは、それだけ果たさなければならない役割が多いということでもある。農村の教育問題を誰よりも多く経験してきた‘農村’の教師達に、農村問題の解決はすなわち彼ら自身の問題を解決していくことであるという主体意識が、多様な形態の参加として現れた結果だといえる。

2つ目、教育活動を通じた多様な形態の教育連帯をリードしたという点である。教育を通じた地域住民との出会い、学校との連携活動、大学の研究者との結合などが、その代表である。このような活動が教育を通じた地域の再生と教育ネットワークという成果に表れている。

3つ目、農村住民達の生活と地域の現状に対する理解を基礎に、農村教育問題を解決し、プログラムを開発していったという点である。地域の一員として、地域の教育問題をともに解決していこうという努力が、地域に根を張るための力となった。

4つ目、プログラムを進行するに従って顕在化してきた財政的困難を、政府や企業等の公募支援事業を通じて自ら解決に乗り出したという積極性である。

5つ目、地域の文化の中から教育プログラムを開発し、これを活用したという点である。

6つ目、廃校を地域民達の教育活動場として開放し、その空間的利点を生かしたプログラムを開発し実践してきたという点である。

5. 参加主体別分類

(1) 地域住民達

忘れ去られていく地域の伝統文化に対する価値を再認識する契機となり、老人会を中心に農村文化体験の講師ならびにプログラム企画者としてともに協力することで、文化芸術教育に関するマインド形成ならびに地域文化を掘り起こす力を強化してきた。また、このような活動を通じ、地域に対する自矜心を育て、農村文化の可能性を発見させた。このような活動は、究極的には文化を媒介とした地域の農村教育文化共同体の再生ならびに活性化の原動力となっている。

(2) 地域民間団体（忠南教育研究所）

地域とともに歩む生きた教育の場を創り出す活動を通じ、地域に根を下ろす民間研究所としてその地位を確保し、農村教育文化を護る役割を担当することとなった。

(3) 参加青少年ならびに家族

多様な教育文化活動経験の幅を広げることができ、農村地域文化と自然生態の大切さを認識

することに繋がり、地域に対する誇りをもつ契機となっている。

6. 今後の共同体活性化戦略：参加主体形成のための方法

(1) 住民達の伝統文化に対する意識高揚と自発的实践単位形成の必要性

農村教育文化共同体事業の主体は住民達であり、彼らの主体的力こそが事業の持続可能性と力強さの前提である。住民達の自発的・能動的参加を導き出すためには、住民達自身の生活に価値を付与することが前提とならなければならない。

しかし、当初、住民達の日常における共同体文化や伝統料理などの郷土文化に対する住民達自身の自矜心と価値評価は、それほど高くはなかった。そのため住民達の自発的・能動的参加を導き出すための住民講座と協議体制がまず創り上げられなければならなかった。また、鳳峴里は萩火洞火祭⁹⁾、喪輿ソリ、稲こきソリ、麦豊年ユンノリ¹⁰⁾など、村特有の伝統文化が比較的原型そのままに保存されており、住民達の日常の中でおこなわれているが、それを担っているのは主に60代以上の老人達であり、これを引き継ごうとする青少年達はそれほど多くはない。そのため、このような文化が継承・再生されるためには、伝統文化保有者と継承者間の文化継承装置を用意しなければならない。

(2) 住民主導の農村教育文化共同体事業施行のための方法

全ての事業は、住民の自発性（住民総会の合議）にもとづき実行され、住民の生活上の要求と連携し進められるものである。目的事業の推進のために住民を動員するという方式ではなく、住民の日常生活に目的事業を連携させるという方式で進められる。

これにより、目的事業推進のための文化継承事業と生活形成事業のために、村住民と忠南教育研究所間の常設協議体である鳳峴里教育文化共同体協議会を構成し、この協議会は文化継承事業と生活向上事業を主要目的に、共同の発展方法を持続的かつ力強く推し進めている。

文献

- | | | |
|-----------|-------|--|
| ヤン・ビョンチャン | 2008a | 「農村学校と地域の協働を通じた教育共同体形成」『忠南農村教育希望探しネットワーク発足式資料集』 |
| | 2008b | 「韓国の地域教育共同体運動の展開—忠南教育研究所の農村教育文化共同体実践を中心に」『北海道大学教育学部学術シンポジウム資料集』 |
| 李鎮哲・趙誠姫 | 2008 | 「教育安全網事例研究」韓国教育開発院 |
| 趙誠姫 | 2005 | 「実践的地域問題を研究し悩む忠南教育研究所」『我らの教育』4月号 |
| | 2007 | 「学校と地域社会疎通を通じた農村教育希望探し」『我らの教育』1月号
忠南教育研究所事業計画書ならびに内部文献（2000～2008） |

訳注

- 1) 「相生」とは、五行説で、木が火を、火が土を、土が金を、金が水を、水が木を生じる事、そうした関係を指す。「相克」の対義語。
- 2) 公州市からの指定をうけておこなわれている事業で、一週間のうち5日（平日）は都市で、2日（週末）は農村で過ごそうという意味。都市と農村間の交流促進という目的と、農家所得を増加させる方策として、農村文化体験などととも、都市住民達を対象におこなわれている。
- 3) 喪輿ソリ=葬列歌

特集② 趙（訳：神谷）忠南教育研究所農村教育文化共同体活動の事例

- 4) 「作目班」は農民の作る組織の一つ。特定の同じ作物を作る農家が集まり、主に流通場面における協働をおこなうことで、個別経営は維持したままで、大規模経営の利点を実現しようとする目的で作られる。鳳峴里には、栗栽培農家が組織する栗作目班があるという。
- 5) マウル＝村
- 6) 祖孫家庭＝祖父母と孫が同居する家庭
- 7) 「法古創新」は、伝統文化を基盤としながら外来文化を創造的に受容するという、実学の思想。
- 8) 「セトミン」は、直訳すると「新しい土地に来た人々」となり、いわゆる脱北者を指す。
- 9) 蓬の固まりを路傍に並べ、それに火を付けて悪いものを払う祭り。
- 10) 「ユンノリ」は、主に旧正月や陰暦1月15日のデポルム日におこなわれる、双六と駒取りを合わせたような遊び。